

## [巻頭言]

# 児童生徒が課題を設定する場面を授業デザインしよう



文部科学省 初等中等教育局 視学官 藤 枝 秀 樹

新しい学習指導要領が小学校では来年度から、中学校では令和3年度から完全実施され、高等学校でも令和4年度の1年生から年次進行でスタートする。新学習指導要領においては、これからの時代に求められる資質・能力を明確にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を通して、子供たちの資質・能力の着実な育成を目指している。とりわけ、高等学校の理数教育においては、将来、知の創出をもたらすことができる創造性豊かな人材の育成を目指し、新たな探究的科目として、「理数探究基礎」及び「理数探究」を新設した。これはひとえに、理数科高校やスーパーサイエンスハイスクールなどで取り組んできた「課題研究」の取組が高く評価されてきたことに他ならない。

「課題研究」を実施するためには、探究の過程として、まず、『課題の設定』を行う必要がある。「理数探究基礎」の学習指導要領解説では、課題の設定のための留意点として、『課題を設定させるためには、身の回りにある自然事象や社会的事象等に関心をもたせ、なぜそうなっているかという疑問や、どうやって解決すればよいかという問題意識などをもたせることが大切である。例えば、数学や理科などの授業で疑問に思ったことを基に課題を設定させたり、科学史などの話題を参考に課題を設定させたりすることが考えられる。』と述べられている。

ちなみに理科では、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する観点から、観察、実験を行うことなどを通して探究する学習活動をより一層充実させるために、例えば、情報の収集、課題の設定、仮説の設定、実験による検証、実験データの分析・解釈などの探究の過程を明確化した。探究の過程全体を生徒が主体的に遂行できるようにすることを目指す中で、生徒が常に知的好奇心をもって身の回りの自然の事物・現象に関わるようになることや、その中で得た気付きから課題を設定することができるようになることが大切だからである。

今こそ自身の授業を見直すチャンスである。ともすれば、授業の課題を教師が設定していることが多くないだろうか。課題を教師が与えていないだろうか。つまり、教師がある自然事象を提示することによって、児童生徒がその事象に疑問や感動などを抱き、自ら課題を設定するような授業場面を、時には、デザインしてほしいものである。